聖泉看護学研究　Seisen J. Nurs. Stud., Vol.13. pp.83-88, 2024

その他

母性・小児看護学領域の協働による子育て支援を学ぶ教育実践報告

Education Practice Report on Learning Parenting Support through Collaboration between Maternal and Pediatric Nursing Fields

花原　恭子[1)]，平田　美紀[1)]，小倉　由紀子[1)]，村井　博子[1)]
Kyoko Hanahara，Miki Hirata，Yukiko Ogura，Hiroko Murai

キーワード　看護学生，子育て支援，次世代，小児看護学，母性看護学，協働
Key words　Nursing students，childcare support，next generation，pediatric nursing school，maternal nursing school，work

Ⅰ．はじめに

2021年看護師養成教育の第５次カリキュラム改正では（文部科学省，2021），人口構造や家族形態の変化による多様性のある対象を理解し対応できる能力が求められ，本学においても多様な対象に対応できる専門職を育成する新カリキュラム改革が行われた（西山ら，2022）．それに伴い，子育て支援については，子どもとその家族に適切なサポートを提供する能力を必要として母性看護学領域と小児看護学領域の協働による「ペアレンティング論」の科目が新設された．それに伴い，母性看護学と小児看護学それぞれの専門性を残しつつ，時代の変化に対応できる看護職の育成を目指した授業計画が求められた．

わが国は，女性の社会進出により，未婚化，晩婚化の影響で少子化が進んでおり，また家族形態も多様化している．そのため，看護学生においても，児の発育・発達や育児中の養育者の思い，家族・家庭の機能を深く理解して子育て支援を考えることが求められる．しかし，看護学生は，生まれる前から少子化･核家族化時代であることから，これまでに異年齢の世代との交流体験が少ないことにより理論と実務が結び付きにくいため，対象が理解しにくく現実的なサポートやアドバイスを提供する能力に影響を与える可能性がある．そのため，本学での看護基礎教育において，子育て支援者としての基礎的知識を習得し，対象の理解と現代の子育て支援を考えるための科目を展開したため，その内容を報告する．

Ⅱ．本学のカリキュラムにおける「ペアレンティング論」の位置づけ

本学の建学の精神は「人間理解と地域貢献」であり，看護学部の教育理念に基づき卒業生に求められるディプロマ・ポリシー（以下，DP とする）は，８つの柱で示されている．そのうち，ペアレンティング論では，「自ら成長する力」「他者と関係を築く力」「人間の生命と尊厳を護る力」「人間を総合的に理解する力」の４つの DP を身につけることをねらいとしている．配当年次と実施時期は，母性看護論および小児看護論の履修が修了する２年次前期で，単位数は１単位，時間数は15時間（１コマ90分）の選択科目とした．担当講師は，母性看護学領域２名，小児看護学領域２名の教員から構成した．

Ⅲ．「ペアレンティング論」の位置づけ

１．母性看護論

母性看護論は必修科目（１単位）で，２年次前期に開講している．ねらいは，看護学の一つの柱である母性について学び，その特徴や概念，対象について理解を深めることである．また，より専門的な性と生殖のメカニズムや，リプロダクティブヘルス・ライツの考え方を学び，グローバルな視野で女性のライフサイクル各期の発達に応じた健康問題や看護を修得できるよう工夫している．そのため母性看護論は，女性や母親を主軸に講義を進め，母親の視点に立った内容となっている．

１）聖泉大学看護学部　Faculty of Nursing Seisen University

2．小児看護論

小児看護論は必修科目（1単位）で，2年次前期に開講している．ねらいは，小児看護の対象である子どもとその家族について，我が国における子どもを取り巻く環境を保健・医療・福祉・教育の視点から学び，子どもが家族や社会から適切に保障されるべき存在であることを理解することである．そのため小児看護論は，子どもを取り巻く環境の変化，発達理論，子どもを守る法律や施策の内容など子どもの視点に立った内容となっている．

3．「ペアレンティング論」の概要

子どもが生まれ育つために必要な父親・母親の価値観や養育に対する考えを共有するペアレンティングについて概説する．妊娠・出産・育児の一連の過程や子どもの成長・発達に応じた子育ての悩みから，時代の変遷と現代の子育ての社会的背景や課題について考える．また，プレコンセプションケアを通して次世代を担うための健康について考え，さらに子育ては父母・祖父母の世代間において生命の循環を通して，成長・発達していることを学び，現代の子育て支援について考える．授業は講義，グループディスカッション，発表の形式で行う．

講義の到達目標は3点とし，子育てにおけるペアレンティングの必要性が説明できる，子どもの成長・発達に応じた子育て支援について考察できる，最後に，世代間の生命の循環と現代の子育てについて考察できるとした．

Ⅳ．倫理的配慮

本科目開始前には，成果の公表依頼を口頭で行い，プライバシーの保護，データの匿名性について説明し，同意を得た．

Ⅴ．「ペアレンティング論」の授業の実際

1．授業の実際

第1回目は，時代背景に応じた子育ての変遷と現代のペアレンティングについて学ぶことを目的とした．また，導入として学生自身の通過儀礼について家族からその時の様子や家族の思いを事前に情報収集する課題を提示した．通過儀礼は，一生の間に通過するお食い初めや七五三祝いなどの儀礼や儀式のことであり，学生にとっては思い出の一つとして記録や記憶に残っている．それらの写真や家族の思いを6～7名1組のグループを編成し共有した．また講義において，子どもを育てること，「親」になることとはなど，子育て支援の歴史的変遷や，ライフサイクルごとの子育て支援の概要について教授した．

第2回目は，周産期の妊娠期から育児期を通して父親・母親になる過程について学ぶことを目的とした．周産期のメンタルヘルスケアの現状や課題・支援について講義した後に，個人ワークにて「新聞記事から周産期の子育てに関連したテーマについて取り上げ要約し，それに対する自己の意見を述べる」という課題に取り組んだ．

第3回目は，乳児期・幼児期の子どもの成長・発達に伴い起こる子育ての悩みについて学ぶことを目的とした．講義では，乳幼児期の身体･心理･社会的側面の発達的特徴を学び，その後，「学生のイメージする『子育てとは』どのようなことか」についてグループワークを行った．さらには，乳児期の子どもとその母親1組をゲストに招き，乳児の遊びを実際に見学し母親の子育てにおける実際の思いを語ってもらった．学生はグループワークにて乳幼児の子育てに対する意見交換や，ゲストへの質問により，母子関係の理解に繋げていた．また，この時期の子育ての社会的背景として，児童虐待や虐待に対する支援のしくみ」についての講義を行い，現代の課題を結び付けて考える機会とした．さらに講義後は個人ワークにて，「乳幼児期の子育てや地域社会に必要なこと」，「この時期の現代の子育ての課題」について個人ワークに取り組んだ．

第4回目は，学童期・思春期の子どもの成長・発達に伴い起こる子育ての悩みについて学ぶことを目的とした．講義では，父親の家事・子育てに関する役割の変遷，母親の就業と子育ての特徴，学童期・思春期の身体・心理・社会的側面の発達的特徴を教授した．また，幼児期・学童期・思春期の子を持つ父親と母親をゲストに招き，子育ての実体験とそれぞれの立場からの子どもや子育ての思いを語ってもらった．その後，グループワークで意見交換し，ゲストへの質問にて交流し，親の思いの理解につなげた．また，講義後は個人ワークにて，「父親の子育てに必要なこととは」，「こ

の時期の子育てに必要なことおよび，現代の子育ての課題」について取り組んだ.

第５回目は，プレコンセプションケアの現状を学び現代の子育ての課題を考えることを目的とした．妊娠・出産は適切な時期があり，正しい知識を持ち自分のライフプランに合った生活習慣を身につけ，将来の妊娠や体の変化に備えて健康に向き合うことが重要であるという視点から，講義では，性と健康に向き合い，妊娠前からもっている母体のリスク因子や，妊娠・出産・子どもの健康に影響を与える現状と課題について教授した．その後，個人またはグループワークにて，「プレコンセプションケアの現状から次世代（子育て）を育むために今の自分たちに何ができるか？」について検討し発表した.

第６回目は，子ども・父母・祖父母の世代間循環につながる子育てや，子育てをしながら親も育つことについて考えることを目的とした．事前課題では，「祖父母についての印象や親と比べて自分への関わりの違い」について取り組んだ．講義では，育てられている者から育てる者への世代間伝達とはという視点で，生涯発達過程の視点からみた関係発達にてついて教授した．その後，孫を持つ祖父をゲストに招き，孫を育てる娘への思いなどについて語ってもらった．その後，グループワークで意見交換し，ゲストへの質問にて交流を図った.

第７回目は，これまでの講義を受けて，時代背景，世代間循環，子どもの成長・発達を通して現代の子育てについて考えることを目的とした．テーマは，「周産期，乳幼児期，学童・思春期，祖父母の一時期における子育ての変遷について調べ，現代の子育ての課題と対策を考える」とした．これまで共に取り組んだ６～７名１組のグループを４名の教員がそれぞれ担当して，課題支援を行った.

第８回目は，第７回から取り組んでいるグループワークの成果をパワーポイントにまとめて発表し，質疑応答にて現代の子育ての学びを共有した.

２．学生の反応

第１回目は，学生自身の思い出を写真と共に家族の思いについて語ることで，これまでの歩みを振り返り，そして，メンバー間で共有することができた．この経験を通して，これまで大切に育てられていたという事実に気づき，受け止め，自己を肯定的に捉える機会になった様子であった．また，多様性のある家庭においても，夫婦間のコミュニケーションの重要性や親の子どもを思う気持ちに変わりはないととらえている学生もいた.

第２回目の周産期のペアレンティング論では，子育てを取り巻く社会的環境からの問題は様々であることに気づき，テーマに関する当事者の課題や社会システムについて理解している様子であった．子育てにおいては，親の孤立を防ぐための切れ目のない支援を行なうことでメンタルヘルスケアに繋がることや，家族や社会的な支援の必要性などについて学んでいた.

第３回目は乳幼児とその母親のゲストから，この時期の子育ての過酷さや周囲からのサポートの重要性を学んでいた．乳児の遊ぶ姿の愛くるしさから，子どもに対して愛着を感じた学生も多く，子どもの成長発達の特性とその安全性におけるリスクや課題について気づく学生がいた．さらには，母子の関係性や相互反応，母親の子どもや夫に対する思い，子育ての思いに触れ，母親の子どもへの深い愛情を実感できる機会になっていた.

第４回目は幼児期・学童期・思春期の母親と父親のゲストから，その時期の子どもや子育ての思いに触れ，子どもとの接し方が乳幼児期と変化しており，見守りや必要な時に手を差し伸べるという役割に気付く学生もいた．また，父親の子どもや子育てへの思いを聞く機会は，学生にとって新鮮な体験であった様子がうかがえた．その体験から，学生自身の父子関係を振り返り，父親の子育てへの思いを想像している様子であった．また，子育てを母親目線でしか考えられていなかったことに気づく学生もいた.

第５回目のプレコンセプションケアと子育てについては，青年期である自身の妊孕性を高める健康の取り組み方について考え，また，性に関するコミュニケーションにおいて自己中心的ではなく相手のコンディションにも配慮することの重要性に気づくなど，パートナーとの性差を意識しながらも男女が互いを思いやる気持ちの大切さについて気づく学生が多くいた.

第６回目の世代間循環と子育てにおいては，孫を持つ祖父のゲストの話を聴くことで孫の誕生を喜び，孫や娘を見守る存在について意識することができた．また，母親や父親，子どもにとっての

身近な祖父母の存在やサポートの重要性についても学んでいた．さらには，祖父母も子育て孫育てを通して成長していることに気づく学生もいた．

各ゲストそれぞれの立場から，リアルな子育ての思いを聴くことで，学生は，子育ては母親だけで行うものではなく，パートナーである父親や祖父母との連携の中で取り組んでいくことの重要性を学んでいた．それと同時に，学生自身の母親・父親・祖父母と重ねながら，育ててもらった感謝の思いを感じている学生も多くみられた．

第７回目・８回目の単元では，最終課題であるライフサイクルごとの現代の子育ての課題への支援についてグループワークにてまとめることができた．しかし，課題に対する支援の必要性は感じることができたが，取り組まれている支援策を挙げることにとどまり，対象の生活や地域の特性を踏まえた具体的かつ現実的な支援策まではイメージしにくい様子であった．

Ⅵ．考　察

わが国の2022年の合計特殊出生率は過去最低の1.26と初の80万人割れとなり，2023年６月に創設されたこども家庭庁は，「異次元の少子化対策」として「子ども未来戦略方針」を発表した（子ども家庭，2023）．青年期にある大学生は，生まれる前から少子化・核家族化時代であることから，自分が親になるまでに乳幼児と接した経験のある若者は少なく，今日の社会変動の中で，自分が親になるイメージを簡単に描けなくなっている．実際に本科目を受講した学生の中には，子育て中の対象をイメージしにくいため想像上の世界としてとらえている様子があった．しかし，本科目において異年齢のゲストの交流等により子育ての思いや考えを聴き，グループワークにて共有することで具体的に親となる自己像や子育て中の対象者の生活をイメージしながら学びを得ている様子が伺えた．家族・家庭の機能を理解し子育てを学ぶことは，青年期に当たる看護大学生にとって，看護師としての支援者という立場だけではなく，近い将来親になるための「親性」を育むための重要な時期である．大橋（2009）は，親性とは，すべての人がもっているものであり，女性と男性に共通する，自己を愛し，尊重しながら，他者（子ども）に対しても慈しみやいたわりをもつという性質，ライフステージとともに発達していくものであり，妊娠・出産・育児期では，子どもに対して保護や育成という能力で発揮されると述べている．このように，親性を育むことは，大学生にとっての親役割に触れ，将来親となるライフプランを学ぶ機会にもなり得ると言える．本科目を通して子育ての楽しさややりがい，成長発達に繋がるというポジティブな側面だけでなく，子どもの成長に合わせた関わりの難しさやキャリアとの両立の大変さ・困難さなどの側面も感じる機会になっていた．この学びから，子育てにおける親の役割や責任だけでなく，周囲の家族や社会の支援を受けながら取り組むことの重要性も学ぶ機会となり，親性を育む機会になったのではないかと考える．

看護職は看護支援者としての役割を担い，さらには地域行政を含めた多職種連携チームの一員として期待されている（日本産婦人科医会，2021）．また，看護者は，あらゆる健康レベルの子どもたちの健康や成長・発達を看守り支援する重要な役割を担っており（小児看護学会，2023），看護学生も同様に，子育てを取り巻く現状や支援についての学習を進めていく必要がある．本科目の学びを通して，これらの看護職の支援者としての役割の意義を感じるきっかけにもなっていた．

今回，本科目において大学生に乳児とその母親，幼児期・学童期・思春期の母親と父親，孫を持つ祖父の子どもや子育てに関する思いについてアクティブラーニングを通して触れる機会を得た．これにより，これまで生きてきたプロセスを振り返り，自身の親の思いやゲストの子育てに対する思いに触れ，その学びを子育てに関する考えに投影することで，理想の母親・父親像として新たなイメージをもつ学生が多くいた．このことより，本科目が将来親となるライフプランを学ぶ機会になったと言えるのではないだろうか．

さらには，将来的に子育てをしながら家庭と仕事の両立に向けた過酷さや尊さを学ぶことで，キャリアプランを組み立てる基盤づくりとなる機会にもなった．また，この経験や学びを一人の女性，男性としてだけでなく，子育て支援者としての看護師の役割について学ぶ機会にもなったと考える．本科目においては，学生の学びを科学的に評価するまでには至らなかったため，今後は，研究的視野を入れた評価を含めて取り組んでいきたい．

Ⅶ. おわりに

本科目は，母性看護学領域と小児看護学領域の横断的な協働にて子育て支援をテーマに養育者・看護師としての次世代の育成能力を高めることを目指した．その結果，看護師としての支援を学ぶことで子育てに興味関心が高まり，学生自身が育てられた環境に対して感謝する力強い姿を目の当たりにした．特に，初学者である看護大学生にとって，子育て支援の中心となる子どもや養育者（親や祖父母）との異年齢の交流は，多様性のある対象を理解する基礎的知識として重要な視点であった．また，本科目においてアクティブラーニングを取り入れることは，課題解決型といった学生の思考や表現を引き出す機会にもなっていた．今後も子育て支援における多様性のある対象の理解が深められる機会となる質の高い講義づくりに取り組んでいきたい．

謝　辞

本科目を実施するにあたりご協力を賜りましたゲストの皆様，「ペアレンティング論」におけるご指導を頂きました諸先生方に深く感謝申し上げます．

文　献

こども家庭庁．(2023)：「こども未来戦略方針」，https://www. mhlw.go.jp/content/12601000/001112705.pdf.

西山ゆかり，他．(2022)：多様な対象に対応できる専門職を育成する新カリキュラム　看護師教育課程，聖泉看護学研究，11，63-70.

文部科学省．(2021)：看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～の策定について https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm.

日本産婦人科医会．(2021)：妊産婦メンタルヘルスケアマニュアル，中外医学社，東京.

日本小児看護学会．(2023)：日本小児看護学会とは，https://jschn.or.jp/about/.

大橋美幸，浅野みどり．(2009)：親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討―親性の概念明確化に向けて―，家族看護学研究，14（3），57-65.